

佐佐木信綱と「国学」の再編

これまで 010 稿～013 稿を通じて『賀茂真淵と本居宣長』という本が、「排蘆小船と宣長の歌論」によって『排蘆小船』の発見を学会に報告し、「松坂の一夜」という「小篇」の物語によって真淵と宣長の一回的な出会いの意義を印象的に示したこと、後者は学問上の美談として国民教育の教材になったことについて、facts をもとに分析を提示してきた。

ここで、いったん facts から導かれる私なりの解釈 interpretation をまとめることにする。

佐佐木信綱が『賀茂真淵と本居宣長』という書物を通じて達成したことは、次の 2 点であった。

A. 「国学」の学脈の根幹を形成するのは「契沖」「賀茂真淵」「本居宣長」の系譜であることを確定し、国学を実証的文献学として再定礎する方向を示したこと

これによって、思想的な色彩の濃い平田学派は、近代の「国学」から排除されてしまうことになった。ここに「国学」は実証の学として再定礎されたのである。

これにともなって、佐佐木自身の学問も変っていった。従来の佐佐木の「歌学」では戸田茂睡が重視されていたが、佐佐木が昭和 10 年（1935）に『国文学の文献学的研究』という書物を岩波書店から公刊した際には、「契沖」「賀茂真淵」「本居宣長」の系譜が骨格になっている。同書は、それ以前の著作である『日本歌学史』や『和歌史の研究』を「国文学」と「文献学」というコンセプトを軸に組み替えた書物に他ならないのである。なるほど佐佐木の好みで戸田茂睡にはなお特別な位置が与えられているが、戸田茂睡以後の系譜は、契沖、真淵、宣長が特筆されている。佐佐木は自らの「歌学」を「国文学」という枠組みから組み替えている。そうした「国文学」という枠組みへのシフトは、父親の弘綱とともに帝国大学文学部附属古典講習科の系譜に属していた佐佐木からすれば、少なからぬ立場の変更を意味するものであった。

しかし、後にも触れるように、佐佐木の文献渉猟は帝国大学の初代国語研究室教授であった上田萬年とともに行われており、また、契沖研究に関しては女婿の久松潜一を支援しつつ継承している。佐佐木が東京大学文学部の国文学に果たした役割は、文献学的方法に関わる所で甚大であった。

B. 「国学」の学脈の要の位置を占めるのは、国家の神話を初めて解読するという偉業を達成した「本居宣長」であるということを真淵から宣長への子弟血脈の物語によって印象づけたこと

これによって、『古事記』が「国学」のもっとも重要な文献であり、それは、中国思想の影響を蒙る以前の「古道」をあらわしているからだという宣長の主張が、学界と教育界という明治国家にとっての思想統制装置を通じて、自然に、かつ、なかば欽定に近い形で浸透することになる。

ただし、佐佐木自身は、『古事記』については昏かったため、ついに宣長の古事記研究そのものに関して踏み込んだ文章を著わすことはない。上記の『国文学の文献学的研究』においても、『万葉集』の古写本についての書誌学的な研究が詳細に書かれているのに対し、『古事記』の書誌学・文献学につい

ては全く言及がなされていない。

畢竟、『古事記』についての研究には届いていなかった佐佐木としては、「国典」としての『古事記』の重要性を主張するには、「松坂の一夜」という文学的な作品を綴り、これを国定教科書によって浸透させるという戦略に出るほかはなかったのである。

以上要するに、佐佐木信綱は、まず「排蘆小船と宣長の歌論」を通じて『排蘆小船』を学会に紹介するという一事件を演出しつつ契沖から宣長への学問上の系譜を実証的方法の継受を軸として示し、「松坂の一夜」という印象的「小篇」をもって真淵から宣長への学問上の系譜を『古事記』を軸として示したということになる。

これは、今日の視点から見ても、一見正当な国学史観に見えるかもしれない。

しかし、上に述べたように、幕末まで強い影響力を持っていた平田篤胤は「国学」の系譜からはずされ、荷田春満・賀茂真淵・本居宣長・平田篤胤を「国学の四大人」とする神話も打ち砕かれてしまったのである。幕末まで大きな力を持った平田学派の思想は、帝国大学文学部の「国文学科」の系譜を定礎した上田萬年や芳賀矢一と連携した「古典講習科」の系譜の佐佐木信綱の仕事によって、「国学」の歴史から排除され、「国学」は実証的な学問として再編成され、それが本来持っていたはずのイデオロギー的な要素は消去されてしまった。

明治の帝国大学文学部の「国文学」は、後にも触れるが、西欧の博言学（言語学）、文献学を基礎として、その理論的な構築を行ったのであるが、その中身を埋めたのは江戸期以来の「国学」を文献学的に再編成したものだったのである。前者の理論的な枠組みの整備に当たったのが上田萬年と芳賀矢一であり、後者の「国学」の再編成をになったのが佐佐木信綱だったのである。

いずれにしても、佐佐木信綱自身が『国文学の文献学的研究』へとシフトしていったことが示すように、「近代国学」（藤田大誠氏『近代国学の研究』の用語）は、上田萬年と佐佐木信綱のタグを通じて「国文学」へと吸収されていったのである。藤田氏の言うように「古典講習科」は、その教授陣が端的に示していたように、「国学科」に他ならなかったが、国家の教育政策としては「国文学」に吸収されるべきものであったわけで、実際、明治19年（1886）の帝国大学令公布から2年後に廃止されている。

しかし、「国文学」と「国学」の2つの学脈を統合するすぐれた業績が村田典嗣、大久保正らによって生み出され、また、佐佐木の衣鉢を継いだ久松潜一が佐佐木の指導の下に契沖の文献学的研究を深化させていったことで、江戸期の「国学」の業績は明治国家の「国文学」の枠組みに文献学として吸収されることになったのである。

このように見てくると、『排蘆小船』の発見と「松坂の一夜」の物語とは、実証的な「国文学」の定礎へ向けたロードマップを前に進めるために発表されたものと言ってよいだろう。

2020年3月28日 研究代表者 西澤 一光